

# 31F-am15

星薬科大学キャンパスの樹木種・数とその変遷

○三澤 美和<sup>1</sup>(<sup>1</sup>星薬大)

星薬科大学キャンパスの樹木調査を10年毎に3回行った。東京都内の1薬科大学の樹木の種類と変遷を見ることで、薬科大学で勉学する学生たちの自然環境の状況を垣間見ることができるのではないかと思う次第である。

1920(大正9)年に創立者星一が現在の品川区荏原の地に現校地約1万坪を入手して以来70年を経た1988(昭和63)年夏、キャンパスの樹木調査を行った。星薬大に生育し佇みその歴史を見続けてきた樹木をあらためて見つめたかったからである。その調査結果の一部は、『星薬科大学八十年史』に記載したが、(1m高の直径が5cm以上の)樹木は74種類、計601本であった。その後10年経た1998(平成10)年には77種類、621本であり、数値は10年前とほぼ同様であった。直近に調査を行った2008(平成20)年には74種類、484本と10年で137本も減少していた。大きな校舎がいくつか出来たためである。2006年に薬学6年制になり、校舎の新築、増築が必要となったので致し方ないところといえる。本数の多い種類ベスト10をあげると、イチヨウ68本、カイヅカイブキ65本、サクラ34本、サンゴジュ30本、クス28本、シュロ27本、トウネズミモチ25本、シラカシ16本、ヤマモモ16本、モチノキ15本であった。枝を空に拡げる武蔵野の代表樹であるケヤキは9本であった。種類は74種と多いが、4本以下のものは56種もあり、油断すると消えてしまう運命にある。直径60cm以上の樹木の推移をみると、20年前には4本であったのが、10年前には24本、直近では50本となり、実に大木は確実に成長を遂げている。正門を入れて本館に到る銀杏並木も年々立派になっていることがわかった。これら木々の緑が四季折々、勉学の場、職場、周辺地域社会にどれだけ憩いを与えていることか、とても有り難いことである。